

コンテスト

淑徳与野高校 P N 清詩 さやか

学校から帰ってきて郵便受けを開けると、何通も手紙が届いていた。

「お母さん、手紙届いてたよ。」

ぱりぱりと海苔のおせんべいを食べていたお母さんは面倒くさそうに受け取ると、いくつかは送り主だけ見て机の上に放り出した。多分仕事依頼の手紙だったのだろう。

だけど一通だけ目をとめると、満面の笑みを浮かべて、すぐに中身を読んだ。

「やっと書類審査に通ったわ。」

と、ふくらしたほっぺをゆるませ満足げ。

私も手紙を見てみる。

『この度はお忙しい中、"全国お母さんコンテスト"にお申し込みいただきありがとうございます。おめでとうございます。たくさん応募の中から、見事書類での一次選考通過となりました。おめでとうございます。二次選考はビデオ審査となります……』

「こうしちゃいられないわ。張り切って二次選考の準備をしなくちゃ。」

「お母さんコンテストってなんなの。」

「やあねえ、全国のお母さんがお母さんとしてのプライドをかけて戦う熱い大会よ。」

何のことだかさっぱり分からなかったので、インターネットで調べてみた。

どうやらお母さんコンテストとは、全国で「最も」お母さんらしいお母さんを決める大会のよう形で、グランプリが決まるらしい。とても名誉ある賞だそうだ。おふくらでも母ちゃんでもなく、「お母さん」な人がこそってグランプリを目指すんだってさ。グランプリの賞品は温泉旅行とお米一年分らしい。なるほど、うちのお母さんは絶対にそれ狙いだ。

次の日の朝起きると、台所でエプロンをしたお母さんが卵焼きを作っていた。

「あれ、今日は早いねえ。何かあるの。」

「何言ってるのよ。お母さんたる者、朝は子どもより早起き、朝ご飯とお弁当の準備でしょ

う。お母さんコンテストのグランプリを狙ってるんだもの、もう行動すべてに『お母さん』を染みこませていなくちゃ。」

「そういうものなのね。」

「それよりも、あんたこそなんでこんな時間に起きてくるのよ。」

「え、いつも通りだけど。」

「お母さんの朝の仕事と言えば、お父さんに朝ご飯を作ってお弁当作ってお見送り、一回子どもに声をかけてから洗濯機をまわして、子どもの朝ご飯作り、まだ眠っている子どもを遅刻するわよってたたき起こして、慌てて家を出ようとするところに、おみそ汁だけでも飲んで行きなさい、でしよう。」

「そうなのかなあ。」

うちのお母さんはいつも私より遅く起きるし、そんな忙しい朝は向いていない気がする。

「あと、帰ってきてでもすぐに宿題を始めたりするんじゃないわよ。私が注意するんだから。」
変なの、と思つてよくよくきくと、二次選考のビデオは、お母さんの一日を撮影したものを送らなければならぬらしい。しかも、撮影と編集はすべてお母さん本人が行わなければならないみたい。

だから、それから毎日毎日、朝の忙しいシーンはもちろん、家族を見送った後の洗濯物干しやら家中の掃除やらを撮影していた。いちばんいいものをつなぎ合わせるそうさ。

夜ご飯のレシピを考えているところや買い物先で悩んでいるところ、泣きながらタマネギを切るところまで撮っていた。

私もお母さんらしいファッション選びや子どもがらみのシーンにつき合うので結構大変だった。お父さんもしがしが「こんな飯は食えん！」と怒ったり、早く帰れるのにわざわざ夜遅く帰ってきたりしていた。

こんなにながらばつたのに、結果はビデオ選考で敗退。できあがったビデオを見ると、相当いいんじゃないかと思つたんだけど。

丁寧にコメントが届いた。

『とてもお母さんらしい一日が撮れていましたが、ビデオカメラの扱い、編集技術の高さが残

念でした。』

どうやらお母さんというものはビデオカメラの扱いが下手でなければいけないらしい。なんてったって、うちのお母さんは普段気に入った仕事だけしか受けない気まぐれ映像クリエイターだ。よく分からないけどその道では結構すごいらしく、もちろん今回送ったものの完成度はとても高かった。それが仇となったんだ。

お母さんは落胆して、すぐに遅くに起きて掃除も適当、たまにばかり仕事をする、気まぐれ生活に戻ってしまった。

「あれだけがっぽったのに一円にもならないなんて納得できないわ。」
とまだまだに文句を言っている。

けど、普通のお母さんなら全部普段からやっていることなのだ。賞品がもらえるわけでもないのに。そう考えると世の中のお母さんはなんてすごいんだろう。

私はちゃんと「お母さん」になれるかなあ。